

## 特別展示

# 「貴重史料から浮かび上がる吉田茂像」について

外交史料館では、外務省周年事業や外交史上の重要事件・人物にちなんで特別展示を開催している。外交史料館の展示室は、二〇二四（令和六）年四月に、麻布台ヒルズ森JPタワー五階に移転、リニューアルオープンした。外交史料館の展示室はそれまで、麻布台ヒルズに隣接する飯倉公館敷地内の外交史料館別館の二階にあり、同別館は一九八八（昭和六三）年に吉田茂記念事業財団（当時）から、吉田茂関係史料とともに寄贈されたものであった。そこで当館では、展示室のリ

ニューアルオープンから一周年を迎えたタイミングで、改めて吉田茂を顕彰する意味も込めて、外交史料館所蔵の吉田茂関係史料をお披露目する展示会を開催することとした。開催期間は二〇二五年四月八日～五月三十一日で、展示史料は以下のとおり。

- ① 吉田茂宅の応接間にあった衝立
- ② 吉田茂より北沢直吉宛書翰 一九三九（昭和一四）年二月二四日付
- ③ ラジオ放送「年頭の挨拶」自筆原稿 一九五一（昭和二六）年一月一日放送
- ④ 吉田茂よりL・E・バンカー宛書翰 一九五一（昭和二六）年四月一三日付
- ⑤ マッカーサー『回想記』 一九六四（昭和三九）年刊
- ⑥ 吉田茂米寿祝お礼風呂敷 一九六五（昭和四〇）年
- ⑦ 吉田茂記念メダル

### 【展示史料解説】

- ① 吉田茂宅の応接間にあった衝立

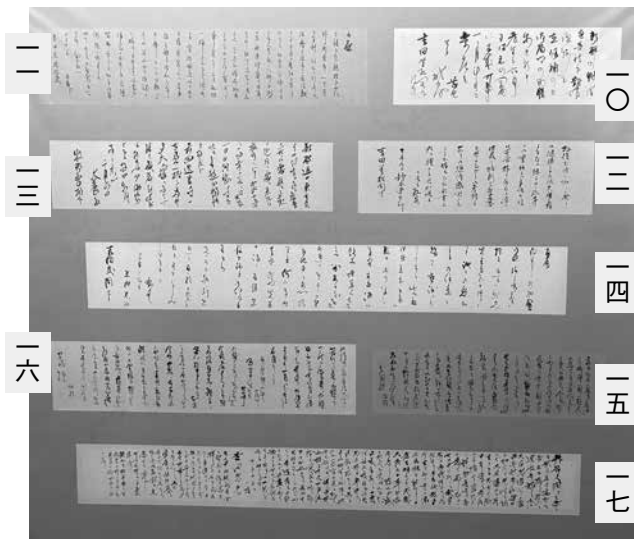




① 書立(表)

大磯の自邸二階応接間に置かれていた書立。吉田は自分が尊敬していた人々の書翰を収集して、この書立に貼り、よくながめていたという。

片面(表面)には、西園寺公望(元首相・元老)、山本権兵衛(元首相)、原敬(元首相)、鈴木貫太郎(元首相)、若槻礼次郎(元首相)、池田成彬(元蔵相)、牧野伸顕(吉田茂岳父、元内大臣)、竹内綱(吉田茂実父、政治家・実業家)、犬養毅(元首相)の書翰が貼付されている。



① 書立(裏)

もう片面(裏面)には、岡田啓介(元首相)、幣原喜重郎(元首相)、鈴木貫太郎、犬養毅、米内光政(元首相)、牧野伸顕、古島一雄(元国会議員、犬養毅側近)の書翰が貼付されている。

本書立は本展示会の目玉展示史料と位置づけられるものであり、両面に貼付された書翰を紹介するパネルを掲示するとともに、全ての書翰の大意と解説を示したハンドアウト、及び書翰発信者の紹介と主な書翰の背景を記した解説冊子を配布した。以下にそれらを掲載する。

● 衝立に貼られた各書翰の大意と解説（番号は前頁写真と対応）

一 西園寺公望より吉田茂宛 一九二五（大正一四）年八月一日付

先日久々にお目にかかって話した内容については、念のため外務省へ申し入れてください。お示しのとおりで至極結構だと思います。蒸し暑い折柄なので、ご自重くださいますよう。病気のため筆の運びが意のままになりませんが、推読いただければ幸いです。

案件は不明だが、外務省にも話を通しておくようアドバイスを送っている。なお、吉田はこの後一〇月に奉天総領事となった。

二 山本権兵衛より伊東祐亨宛 一九〇六（明治三九）年二月一日付

今朝の新聞で、閣下が昨日元帥の称号を賜った旨を拝読しました。明治維新前より閣下は率先して海軍に従事され、幾多の困難を嘗め、数回の戦役を経て国家のために全力を尽くされた功績は大きく、このような優遇を賜るのは当然のことですが、これはひとえに聡明で勇ましい大元帥陛下のご威徳の致すところですが、閣下は一門の名誉のみならず、我ら海軍の歴史上にも光彩を放っております。後進者をして敬慕の至りです。お祝い申し上げます。

伊東は山本より九歳年上で、薩摩藩士の先輩でもあった。吉田は自身が尊敬する鈴木貫太郎が慕う人物として、山本にも敬意を抱いていたと思われる。

三 原敬より牧野伸顕宛 一九一四（大正三）年（？）六月二〇日付

賜物をご送付下さり、お礼申し上げます。今回は思いがけなく先輩の跡を継ぎ、当惑の次第ではありますが、どうにでもなるだろうと会の承諾を致しました。何卒将来然るべきご珍重をくださいますようお願い致します。いづれ近日参上してお話ししたく存じますが、取りあえず右の通りお答えします。

原敬は一九一四年六月に西園寺公望の跡をついで立憲政友会総裁に就任した。牧野はこの三か月前に貴族院議員となり、西園寺の側近として活発に動いていた。政友会新総裁となった原が牧野を頼った書翰だと思われる。

四 鈴木貫太郎より吉田茂宛（年次不明）一二月一七日付

一昨日に上京し、お手紙拝見しました。歳末の御尊志とともに丁寧なるご挨拶を畏れ多くもいただき、大変恐縮です。ご趣旨に従いありがたく拝受いたします。なお、今夏以来老生の恩給について、政府において格別のご尽力を煩わせたにもかかわらず、ついに先方より交渉を拒否して来た旨、枢府書記官長より最近通知がありました。先方にも相当の理由があることと思われまますので、私も何ら心配しておりませんので、ご放念ください。

自身の恩給問題について政府に尽力してもらったにも関わらず、「終に先方より交渉を拒否し来りたる趣き」ということで叶わなかったが、鈴木は心配していないと述べる。「本件に付特に御配慮を煩ハシ候御

「厚情」として、吉田に礼を述べている。

五 若槻礼次郎より吉田茂宛 一九四五(昭和二〇)又は一九四六(昭和二二)年〔?〕一二月二六日付

阪口博士を貴族院議員にご推薦下さり、先ごろ勅任となりました。厚く感謝申し上げます。私が所有している東京の邸宅を進駐軍が徴用する旨内意がありました。総司令部に伝えましたが、私の邸宅は、戦災にて焼き出された親戚や今の縁故がない者の住居としており、私も上京の際には使用していません。もし進駐軍がこれを使用することになれば、貴族院議員、内閣総理大臣であった者として、出京できなくなってしまう。閣下の一声で、私のために活路を開いて下さらないでしょうか。

当時、若槻は八〇歳頃。貴族院議員に推薦された「阪口博士」とは東京帝国大学医学部教授の坂口康蔵か。GHQに駒込の邸宅が接収されることを避けたら若槻は、当時終戦連絡事務局総裁であった吉田にとりなしを依頼した。

六 池田成彬より吉田茂宛 一九四六(昭和二二)年五月一三日付

協同党所属の前代議士某が来訪し語るところによれば、社会党不参加の連立内閣には協同党の参加は困難な情勢であるとの意見でした。また、参加するとしても、同党内の人物は非常に貧弱で、相当の人物がいません。のみならず、今朝の大会にて新党の結成は困難と観測して

います。協同党は信頼するに足らず、また社会党の参加が難しいとすれば、自由、進歩の両党を提げ、保守の旗幟を鮮明にして、勇往邁進・国難救済の壮挙に出られることを希望します。しかも今のような寸刻を争う必要があり、この上の躊躇や遷延は、人民戦線などと称する曖昧な偽党を有利にさせるのではないかと存じます。

A級戦犯指定解除直後の池田成彬が吉田茂に宛てた書翰。当時吉田は、幣原喜重郎の指名により組閣の天命を受け、貴族院議員かつ日本自由党総裁として組閣へ向け動いていた。傍らでは、社会主義陣営による人民戦線の動きを牽制しながら保守基盤を固めようとする池田・吉田らの意識が窺える。吉田内閣は、保守の進歩党と組み一九四六年五月二二日に発足した。

七 牧野伸顕より吉田茂宛 一九四八(昭和二三)年〔?〕一月三日付

昨年冬以来、全国を旅行し誠に苦勞に存じますが、ご巡回の用事について満足な成績が挙げたとお伺いし、お慶び申し上げます。あとは人心の期待する政綱の発表ですが、ありふれた名文句には世間も飽き果てていますので、多岐に渡らず実行に自信のある具体的な条項を掲げることが望ましいと存じます。学者グループの任用は将来一層必要になるでしょう。今日の政局は専門家の研究に待つものが多く、米国大統領のブレントラストのような存在は、今日の日本でも欠かせません。とにかく、非常な難局の際に容易ではない御心遣いが必要であると思われるので、政界の機が熟すまでは、自ら賄うことも止む

を得ないかと存じます。

【追伸】今日の役人の腐敗は甚しく、賄賂が横行しています。この一事だけでも掃除できれば、歴史的事績だと思われれます。

冒頭に「其内一度荻外荘ニも何度奉存候」とあり、旧近衛文麿別邸である荻外荘に吉田が暮らした、一九四七年から一九四八年の間に受信したものと同推測される。当時は第一次吉田内閣のあとに成立した日本社会党の片山哲内閣であり、吉田は下野中だった。牧野はアメリカ大統領のように「ブレーン」で回りを固めるようアドバイスをしている。

八 竹内綱より牧野伸顕宛 一九一四(大正三年(?)) 二月一六日付

今朝はご来訪くださったところ、取紛れて失礼しました。今朝御手紙拝見しました。佐々田は同気倶楽部より電話で聞いたところ不在で面会を果せませんでした。尾崎は熱海よりいまだ帰京していないのとです。今夜お伺いしたいと電話でお伺いしましたが、差支えができました。手紙で申し上げるのはいかがなものでありますが、急ぎのお願いのため左の通り申し上げます。目下の形勢は切迫しており、議會を一週間ないし十日間停会とし、停会中に予算の通過、海軍の問題の解決や各政派の調和の途を講じるのが目下の急務だと考えます。僭越ですが、愚見を御一考に供したいと思います。夜分遅くともお暇があれば、お電話次第でお宅に参り、右貴方のお考えをお聞きしたく存じます。

吉田茂の実父である竹内綱から、岳父の牧野伸顕へ送られた書翰。文

中の「佐々田」は当時貴族院議員の佐々田懋(すすむ)のことと思われ、「尾崎」は尾崎行雄か、あるいは同気倶楽部のメンバーだった尾崎三良の可能性もある。同気倶楽部は大江卓、尾崎三良、竹内綱らが結成した官界政界財界人のサロンで、明治三〇年代前半に隆盛を誇った。当時同会を通じて竹内と牧野との交流があった様子が窺える。

九 犬養毅より牧野伸顕宛 (年次不明) 七月二日付

来たる七日、星岡囲碁会のご案内をいただきありがとうございます。ご指示の通りお尋ねしたく存じます。

囲碁好きで、負けず嫌いでも有名だった犬養毅を牧野が囲碁会に誘い、これに犬養が応じている。

一〇 岡田啓介より吉田茂宛 一九四七(昭和二二年(?))

立候補のためご帰郷の間、勝利をお祈りしております。私も六月には元の岡田になるかと思しますので、一ヶ月ばかりと思つて楽しんでおります。

一九四七年の第二三回衆議院議員選挙に際して、当時七九歳の岡田が吉田に宛てたものと考えられる。第一次吉田内閣による日本国憲法施行直前の衆議院解散(新憲法解散)に伴う同選挙において、吉田の日本自由党は敗北した。「元の岡田」の意味は明瞭ではないが、同年一月に岡田が狭心症で倒れたことからの復帰を指すとも、新憲法施行に伴う立場の変化を意味するとも考えられる。

一一 幣原喜重郎より吉田茂宛 一九四九(昭和二四)年九月一八日付

その後ご病気の経過はいかがでしょうか。一日も早く全快されることをお祈り申し上げます。治療方法については、最も信頼すべき名医が責任を負っておられるので外から口を挟むのは無用かと存じますが、外科手術のほうが確実に見込みがあるとの忠告をなす者もおります。もともと、過日胆石は排出されたとお聞きしましたので、それが事実であれば病根は一掃されたことと喜んでおります。私は党の指示通りに明日出発して岩手県支部結成大会に出席し、二十一日に帰京してすぐに関西遊説に出かけ、月末に帰宅予定です。老いた身ゆえ、労して効果がなないことを恥じております。くれぐれもご自愛くださいますようお願いいたします。

幣原は、吉田を総裁とする民主自由党の最高顧問を務めていた。この書翰からは、病中の吉田茂を補佐し、幣原喜重郎が老体を押して日本全国の党勢拡大に向けて動いていることがわかる。また、一九四九年八月に吉田総裁が病気になったとの記録があることから、この書翰は同年のものであると推定される。

一二 鈴木貫太郎より吉田茂宛 一九四六(昭和二一)年七月九日付

天候不順の時節柄、いよいよご健勝であられることをお慶び申し上げます。日々非常な重任にご多忙のことと存じ、ご苦勞様です。特別のご厚意でシガーをご惠贈くださいましたこと、感謝申し上げます。

終戦時の首相鈴木貫太郎の存命中に吉田茂が首相であった年は一九四六年しかないので、この書翰は同年のものであると推定される。吉田と鈴木はともに葉巻愛好家であり、第一次内閣を組閣して二か月のうちに、鈴木に葉巻を贈った吉田の親愛の情に対し、鈴木が御礼と労いを伝えている。

一三 犬養毅より牧野伸顕宛 (年次不明) 二月六日付

過日東幸治氏より伝言をいただき、種々多忙に取り紛れていましたが、来る九日に旅行することとなり、十五日には帰京予定です。その後お話を伺いたく思います。前回選挙の時は、古島一雄のために多大の声援をいただき、深く感謝しております。

戦後吉田茂内閣を支えた古島一雄は、もともと犬養毅の側近であり、一九一一年の補欠選挙で立憲国民党所属の衆議院議員となり、翌年再選を果たした。文脈から、この書翰は一九一二年または一九一五年の衆議院議員選挙での、立憲国民党の中心人物犬養毅から牧野への支援要請であると推測される。当時牧野が犬養をサポートしていたことがわかる。

一四 米内光政より吉田茂宛 (年次不明) 一二月一六日付

過日は武見先生お知らせの件について懇切な注意をいただき感謝申し上げます。先般は伊勢参宮を兼ねて数日旅行し、その間は相当酒も飲みタバコも喫しましたが、別段のこともなく過ぎましたので、ご安心

ください。そのうち武見先生にお目にかかって爾後の様子をお伺いし  
たく存じます。

戦後吉田茂は、米内光政に医師武見太郎を紹介し、米内はその患者と  
なった。武見は牧野伸顕の孫を妻としており、吉田とは親戚関係にあ  
たる。酒豪でヘビースモーカーでもあった晩年の米内と吉田の交流が  
わかる書翰。

一五 牧野伸顕より吉田茂宛〔日付不明〕

十日間ほどのご旅行はご苦労様でした。いくつか書簡を封入いたしま  
した。原は総裁就任当時のもの一通、犬養の方には古島一雄が選挙の  
時の挨拶状がありました。西園寺侯が出発前に記したものは見当たら  
ず、東京に保存されているかと思えます。

原敬、犬養毅や西園寺といった政治家の書翰がないかを吉田が牧野に  
問い合わせたことへの返信。吉田はこのように諸名士の書翰を収集し  
ており、それが本衝立の作成に至ったとも考えられる。

一六 牧野伸顕より吉田茂宛〔日付不明〕

今後はますます多事が予期されます。自由党は旗印を明白に掲げられ、  
前途の責任が一層加わっていることと存じます。今や世界は自由対赤  
の時代にあり、米国の態度はいよいよ鮮明にその国是を発表している  
のがその実情を物語るものと存じます。我が政界はこの動きを真面目  
に考慮すべきかと存じます。

第一次吉田内閣退陣直後の一九四七年頃の手紙と考えられる。一九  
四六年にはチャーチルの「鉄のカーテン」演説があり、自由主義陣営  
と共産主義陣営の対決が鮮明になったが、牧野はこの「自由対赤之時  
代」に、米国の態度を研究し、世界の趨勢を読むように吉田にアドバ  
イスしている。

一七 古島一雄より吉田茂宛 一九四五(昭和二〇)年〔?〕一〇月  
一三日付

ご無沙汰している間に書状をいただき恐れ入ります。貴宅を訪れまし  
たが灰燼があるのみでした。秋月老人の永眠は惜しまれます。永眠の  
数日前に見舞ったところ言葉も明らかでなく眼に涙をためるばかりで  
した。当方の前途は茫茫として方針も計画もありません。

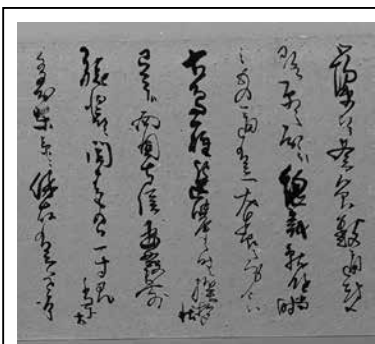
【追伸】比較的安全な郊外に借家を探してくれる友人がいましたが、  
もはやあてになりません。今日の情勢では日本全国各地にも安全地帯  
はないでしょう。腫れ物は糖尿病と関係がないかどうか、一度診察が  
必要かと存じます。

古島一雄は吉田を友人と呼び、戦後の吉田内閣を支えた。書翰の内容  
から、一九四五年に書かれたものと推測される。古島と親交があり、  
外交官として吉田の先輩でもあった秋月左都夫の死を悼んでいる。ま  
た、追伸では、吉田に腫物ができたことについて、糖尿病と関係がな  
いかを心配している。

●書翰の発信者の紹介と関係書翰の解説

牧野伸顕(一八六一—一九四九)

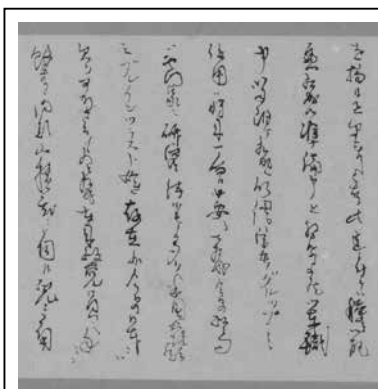
大久保利通の次男として鹿兒島に生まれ、牧野家の養子となる。一八七二(明治四)年、岩倉使節団の一員として渡米。一八七九(明治一二)年外務省入省、駐イタリア公使、駐オーストリア・ハンガリー公使などを務める。第一次西園寺公望内閣の文部大臣、第二次西園寺内閣の農商務大臣を経て、一九一三(大正二)年二月、第一次山本権兵衛内閣では外務大臣を務める。寺内正毅内閣が創設した臨時外交調査委員会では、委員として第一次大戦後の国際協調外交を唱えるなど、しばしば卓見を披瀝した。一九一九(大正八)年のパリ講和会議では、全権として人種差別撤廃を提案した。大正末期以降、宮内大臣、内大臣を歴任し、昭和天皇の信頼が厚かった。



【書翰15】 牧野伸顕より吉田茂宛〔日付不明〕

牧野の長女の雪子が吉田茂の妻であり、吉田にとって牧野は岳父にあたる。吉田は、牧野に対して原敬、犬養毅や西園寺公望といった政治家の書翰がないかを問い合わせていたらしく、【書翰一五】は、それに対する牧野の返信。吉田はこのように

…所謂学者グループの任用ハ将来一層必要ニ可相成今日の政局ハ専門家之研究ニ待ツモノ多ク米国大統領之ブレインツラスト如キ存在か今日の日本ニハ欠ク可からざるものと相成…



【書翰7】 牧野伸顕より吉田茂宛  
1948(昭和23)年〔?〕1月3日付

局は専門家の研究を要するものが多く、学者グループの任用が将来一層必要になることを指摘して、アメリカ大統領のように「ブレーン」で回りを固めるようアドバイスをしている。この書翰は、冒頭に「其内一度荻外荘にも同度奉存候」とあることから、旧近衛文麿別邸である荻外荘に吉田が暮らした、一九四七(昭和二二)年から一九四八(昭和二三)年の間に受信したものと推測される。当時、吉田は日本社会党の片山哲内閣に政権を奪われて下野中だった。また、第一次吉田内閣退陣直後の一九四七年頃のものとして推測できる【書翰一六】でも、自由主義対共産主義という「自由対赤之時代」に、米国の態度を研究し、

諸名士の書翰を収集して、それが本衝立の作成に至ったとも考えられる。例えば、原の「総裁就任当時之もの」と述べている書翰は、この衝立に貼られた【書翰三】を、犬養の「古島一雄選挙之時之挨拶状」と述べている書翰は、【書翰一三】を指していると思われる。

【書翰七】では、牧野は吉田に対し、今日の政

世界の趨勢を読むように吉田に助言している。

これらの書翰からは、晩年の牧野が吉田に政局運営のアドバイスを積極的に行っていた様子が見て取れる。

原敬（一八五六—一九二一）

岩手生まれ。祖父は盛岡藩の家老を務めたが、戊辰戦争の結果家産が傾く。一八七二（明治四）年に主君の南部利恭が東京に共憤義塾を設立すると、将来を見込まれ入学するも、学費の問題から、麹町のカトリック神学校に転学。一八七三（明治六）年に洗礼を受けダヴィデの名を授かる。一八七五（明治八）年、帰郷し兄へ相談の上分家して平民となる。その後東京へ戻り司法省法学校へ入学。一八七九（明治一二）年、郵便報知新聞社に入社。一八八二（明治一五）年一月、大隈重信が立憲改進黨の政党機関紙にすべく報知新聞社を買収したことで退社し、年末に井上馨のついで外務省入省。天津領事、パリ公使館勤務などを経て、一八九五（明治一八）年には外務次官に着任。二年後、朝鮮公使を最後に退官し、大阪毎日新聞社の社長に就任した。一九〇〇（明治三三）年、立憲政友会に入社し第四次伊藤博文内閣の通信大臣に就任。一九〇二（明治三五）年には衆議院議員選挙に初当選し、内務大臣などを歴任した。

一九一四（大正三）年六月、原は西園寺公望の後継として立憲政友会総裁に就任した。【書翰三】に、「今回ハ不図も先輩之跡ヲ継キ如何ニも当惑之次第ニ存候へとも（今回は思いがけなく先輩の跡を継ぎ、当

惑の次第ではありませんが）」とあるのは、原が西園寺の跡をついで立憲政友会の新総裁に就任したことを語っていると思われる。この書翰を受取った牧野伸顕は、この三か月前に貴族院議員となっており、西園寺の側近として活発に動いていた。新総裁就任にあたって原が、「何卒将来然るべきご珍重をくださいますよう」と述べて、牧野に支援を求めた書翰だと考えられる。

原はその後、一九一八（大正七）年より内閣総理大臣を務めた。「平民宰相」と呼ばれ人気が高かったが、一九二二（大正一〇）年東京駅で刺殺された。

西園寺公望（一八四九—一九四〇）

藤原氏北家の公家徳大寺家の次男として京都に生まれ、西園寺家の養子となった。一八七二（明治四）年から約一〇年フランスに留学し、帰国後、伊藤博文のヨーロッパ憲法調査に随行した。一八八五（明治一八）年から欧州諸国で公使を経験した後、政治家として歩んだ。一九〇三（明治三六）年に立憲政友会の総裁となる。一九〇六（明治三九）年に内閣総理大臣となり、桂太郎と交互に首相を担う「桂園時代」を築いたことで知られる。一九一四（大正三）年、政友会総裁を原敬に譲り、一九一九（大正八）年にはパリ講和会議の首席全権としてヴェルサイユ条約を締結した。吉田茂もパリ講和会議の全権随員として同行していた。原の暗殺後は唯一の元老として首班指名に関わり、静岡興津の邸宅（「坐漁荘」）には連日政界関係者が詣でた。

【書翰一】は、西園寺が外交官時代の吉田と意思疎通を図り、助言を与えていたことがわかるもの。案件は不明だが、吉田に対して外務省に話を通しておくように伝えている。

犬養毅(一八五五—一九三三)

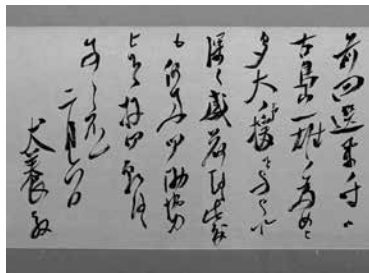
岡山生まれ。一八八二(明治一五)年、大隈重信らによる立憲改進黨結党に尾崎行雄と参加。一八九〇(明治二三)年の衆議院議員選挙に初当選し、その後一七回連続当選。一八九八(明治三一)年、第一次大隈重信内閣で尾崎行雄文相が罷免されると、その後継として初入閣。一九二二(大正元)年、第二次西園寺内閣が上原陸相の辞任により瓦解

前回選挙ノ時ハ

古島一雄ノ為めニ

多大ノ声援を与られ

深く感激致候……



【書翰13】犬養毅より牧野伸顕宛  
〔年次不明〕2月6日付

して第三次桂太郎内閣が発足すると、「憲政擁護・閥族打破」をスローガンに第一次護憲運動がおこり、運動の中心人物であった犬養は尾崎とともに「憲政の神様」として政党政治のシンボルとなった。その後革新倶楽部を結党し、通信大臣を勤めた後、一九二五(大正一四)年立憲政友会に合流し、一九二九(昭和四)年には総裁となった。一九三一(昭和六)年内閣総理大臣を拝命するが、翌年

五・一五事件で暗殺された。

【書翰二三】は、古島一雄が選挙に出馬した際の挨拶状である。戦後吉田茂内閣を支えた古島一雄は、犬養毅の側近であり、明治四四年の補欠選挙で立憲国民党所属の衆議院議員となった。また、翌四五年には再選を果たした。この書翰は明治四五年または大正四年の衆議院議員選挙での、立憲国民党の中心人物である犬養から牧野への支援要請と推測される。当時牧野が犬養をサポートしていたことがわかる。また、【書翰九】は、牧野からの囲碁会への招待に応じる返信であり、牧野と犬養の親しい間柄が伺える。

古島一雄(一八六五—一九五二)

兵庫生まれ。一八七九(明治一二)年に上京し、長く記者生活を送った。一九二一(明治四四)年に衆議院議員補選に当選。犬養毅の側近として活動した。戦後は吉田茂の相談相手となり、一三歳年下の吉田を「友人」と語った。【書翰一七】は、古島と吉田の親交を伝えるもの。

山本権兵衛(一八五二—一九三三)

鹿兒島生まれ。「海軍の父」と称される。一九一三(大正二)年内閣総理大臣となり、吉田の岳父である牧野伸顕を外務大臣に就任させた。また、軍部大臣現役武官制を廃止して政党政治にも理解を示した。吉田との関係では、吉田が幣原外相のもとで外務次官の職にあった一九三〇(昭和五)年三月に、ロンドン海軍軍縮条約をまとめるため、

海軍の有力者だった山本を訪れている。【書翰二】は、薩摩藩士の先輩である伊東祐亨が元帥の称号を賜ったことを山本が祝ったもの。吉田は、自身が尊敬する鈴木貫太郎が慕う人物として、山本にも敬意を抱いていたと思われる。

若槻礼次郎（一八六六—一九四九）

島根生まれ。一八九二（明治二五）年に大蔵省に入省し、大蔵次官まで昇る。官界引退後は立憲同志会に入会し、蔵相・内相などを歴任した後、一九二六（大正一五）年一月より内閣総理大臣。一九三二（昭和六）年四月に第二次内閣を組閣するが、同年九月の満州事変をきっかけに、同年一二月退陣した。政界の第一線から退いた後も、重臣の一人として首班指名や重要国策の協議に携わった。【書翰五】は、GHQに駒込の邸宅が接収されることを避けたい若槻が、当時終戦連絡事務局総裁であった吉田にとりなしを依頼したものの。

池田成彬（一八六七—一九五〇）

山形生まれ。ハーバード大学への留学を経て三井銀行に入行し、一九〇九（明治四二）年からは常務として経営手腕を発揮。一九三三（昭和八）年には三井合名会社の常務理事となり、実質的な三井財閥の総帥となった。日銀総裁や大蔵大臣等を務め、戦後はA級戦犯容疑者に指定され、公職追放されたが、その後吉田茂の相談相手となった。【書翰六】は、第一次内閣組閣を控えた吉田に対し、社会主義陣営の動き

を牽制しながら保守基盤を固める必要性を説いたもの。

竹内綱（一八四〇—一九二二）

高知生まれ。吉田茂の実父。一八八一（明治一四）年に、三歳だった五男の茂を親友の吉田健三の養子に出した。自由党土佐派の指導者の一人として自由民権運動を推進。一八九〇（明治二三）年衆議院議員選挙に初当選し、政治家として活躍し、その後実業家としても手腕を発揮した。【書翰八】は、竹内綱から、岳父の牧野伸顕へ送られた書翰で、大正初年に竹内が牧野と親交があった様子が窺える。

岡田啓介（一八六八—一九五二）

福井生まれ。海軍軍人として日清戦争や日露戦争に従軍し、その後海軍次官や連合艦隊司令長官、海軍大臣などの要職を歴任。一九三四（昭和九）年七月に内閣総理大臣となった。一九三六（昭和一一）年の二・二六事件に首相官邸で遭遇するも、義弟が誤認で殺害され、自身は無事であった。吉田茂とは二・二六事件後に懇意となり、自らの首相時代には岡田の一周忌を首相官邸で行うなど敬意を示した。【書翰一〇】は、一九四七（昭和二二）年の第三回衆議院議員選挙に際して、当時七九歳の岡田が吉田に宛てたものと考えられる。

幣原喜重郎（一八七二—一九五一）

大阪生まれ。吉田にとっては外交官の先輩で、外務次官や駐米大使

を歴任した。英語の能力に定評があり、ウェブスター辞典を肌身から離さなかったといわれる。外務大臣時代は、列国との協調を重んじる「幣原外交」を推進したことで知られる。戦後の一九四五(昭和二〇)年一〇月に内閣総理大臣となり、新憲法の策定などを進めた。第一次吉田内閣では国務大臣を務めた。【書翰一二】からは、吉田を総裁とする民主自由党の最高顧問を務める幣原が、老体を押しして日本全国の党勢拡大に向け動いている様子が伺える。

鈴木貫太郎(一八六八—一九四八)

関宿(千葉)藩士の長男として大阪に生まれる。日清、日露戦争に従軍。一九二三(大正二二)年海軍大将となり連合艦隊司令長官、海軍軍令部長を経て、一九二九(昭和四)年に予備役編入、侍従長に就任した。二・二六事件で襲撃されたが、生還。一九四五(昭和二〇)年内閣総理大臣に就任し、八月一四日のポツダム宣言受諾を実現した。七七歳で首相就任は最高齢記録であった。【書翰一二】は、鈴木に葉巻を贈った吉田茂の親愛の情に対し、鈴木が御礼を伝えたもの。吉田と鈴木ともに葉巻を趣味としていた。

米内光政(一八八〇—一九四八)

岩手生まれ。一九三六(昭和一一)年に連合艦隊司令長官、その後海軍大臣へ転任した。一九四〇(昭和一五)年一月、内閣総理大臣に就任。日米開戦後も、複数の内閣で海軍大臣を務めた。また、戦後も東久邇

宮内閣、幣原内閣に留任し、最後の海軍大臣となった。幣原内閣には、吉田茂も外務大臣として入閣していた。【書翰一四】は、酒豪でヘビースモーカーでもあった晩年の米内と吉田の交流がわかるもの。吉田は、自身と親戚関係にあった医師武見太郎を米内に紹介したことが知られている。

② 吉田茂より北沢直吉宛書翰 一九三九(昭和一四)年二月二四日 付

親友であり、また北沢の上司でもある齋藤博駐米大使の健康を案じているが、吉田の願いも空しく、齋藤大使はこの手紙の日付の二日後、一九三九(昭和一四)年二月二六日、任地ワシントンで死去した。享年五四才。同大使の遺骨は、米国巡洋艦「アストリア号」で横浜まで礼送された。本書翰の末尾に「相当おばあさんの令夫人」とあるのは、北沢の一一才年下の若い夫人のことを、吉田特有のユーモアで表現したものと考えられる。

【翻刻】

拝復、過日御書並書籍難有拝領致候、帰朝以来彼此と取込、齋藤大使之事も氣二懸ながら御不沙汰二候、段々快方との事岩永君より承知致何か送り度と思ひながら郷君出発二も間に合ひ兼候、之れハ全君之御親戚筋なる山口とか光榮女将を頼み二致、何かよいものをと如例甚た空漠抽象命令之結果二付、次幸便二ハ乃公自身出馬選定之覚悟二候、事局之取捨一日も不可空と存焦慮の処廟堂存外吞氣ニて益々焦慮せし

め候、人間ハ矢張大宮人たるに限ると存候、煙草代小切手全封（但し未届かす其内ニと楽しみ候）、乍末筆相当おばさんの令夫人へ宜敷願上候、敬具

二月廿四日 吉田生

北澤老台

侍史

斎藤大使ニハ近日出状之筈

③ ラジオ放送「年頭の挨拶」自筆原稿 一九五一（昭和二六年）一月

一日放送

一九五一年元旦に、新年の挨拶としてラジオ放送した演説の原稿。講和が近づくなかで、前年に朝鮮戦争が発生したことを受けて、すぐさま第三次世界大戦が起こるようなことにはならないが、他方で民主主義と共産主義は相容れず、「冷酷なる神経戦」が「相当久しき二亘つて」続くとして、平和と自由に対する毅然たる決意をもって国際関係に対処すべきであると訴え、国民の決意を促している。

【翻刻】

昭和廿六年を迎ふるに当り、私ハ茲ニ国民諸君ニ新年の祝辞を呈すると共ニ希望を述べんとするものであります

一年の計ハ元旦ニ在り、講和の漸ク近づきつゝある今日、吾人ハ深ク内外の情勢を考へ、静かニ再興日本の将来に思ひを致すへき秋と思ふのであります、去年六月突如とし而北鮮軍か南鮮ニ侵撃し来り、茲に

朝鮮動乱を捲き起し今日に至つた次第でありますか、之を以て直に第三次世界大戦の発端と為し、今ニも我が国が戦争の禍中に投せらるべしと妄信し、周章狼狽の色を示すか如きハ、些か軽率の感なきを得ません

第三次世界戦争は正に世界の文明、人類の破滅の戦であるのであります。如何なる狂暴の国と雖も、容易に之を決意致す筈なく、況んや古來名の正しからざる戦に最終の勝利を取めたる例なきに於ておやである、又国連軍の朝鮮を放棄撤退せざる決意は、屢次の聲明ニ於て明かにせるところであります、戦乱の直に我が国ニ及ふへしとなし、国民を徒らに不安ニ陥らしむるか如き言論は、自ら之を慎むへきハ勿論、国民も亦軽々敷流言蜚語に迷ハざる、如きは、大国民の態度に非らずと申さねはなりません、然らば朝鮮動乱は早急ニ終息すへきや、之も亦軽卒なる論断と謂ふへきであります

民主、共産の両主義ハ到底相容るへからず、其対立抗争の結果、茲ニ冷酷なる神経戦を展開しつゝある次第にて、尚ほ相当久しき二亘つて継続せらるへきものと覚悟せねハならぬのであります、現ニ世上ニ流布せらる、根底なき妄説蜚語ハ、即ち其神経戦の既ニ我國ニも及び居る証左と申すべく此間ニ決して、我國民たるもの拳国独立の精神を以て我國家の存立を守り、常ニ平和と自由と正義ニ與する毅然たる決意を以て、国際干係ニ対処すへきものであります、右顧左眄、狐疑跋扈、徒らに一時の術策技巧を以て、國家を守らんとすか如きハ国とし而最も卑しむへく、救々たる愛國の至誠を以て、正を踏みて恐れざる概あ

りてこそ、列国に伍して自ら尊敬を得る所以であるを確信するもの  
あります

④ 吉田茂よりL・E・バンカー宛書翰 一九五一(昭和二六)年四月  
一三日付

一九五一年四月一日午後、吉田総理が目黒の公邸で総司令部、外  
交団や内外実業家を招いたパーティを開催中に、突如ロイターとUP  
通信がトルーマン大統領によるマッカーサー(Douglas MacArthur)  
解任を報じた。吉田は早速、マッカーサー解任についての声明を発表  
するとともに、この書簡をGHQ最高司令官副官であるバンカー  
(Laurence E. Bunker) 大佐に送った。吉田は四月一四日夕刻にマッ  
カーサーと面会し、翌日には米国大使館において昭和天皇とマッカ  
ーサーの会談が実現した。

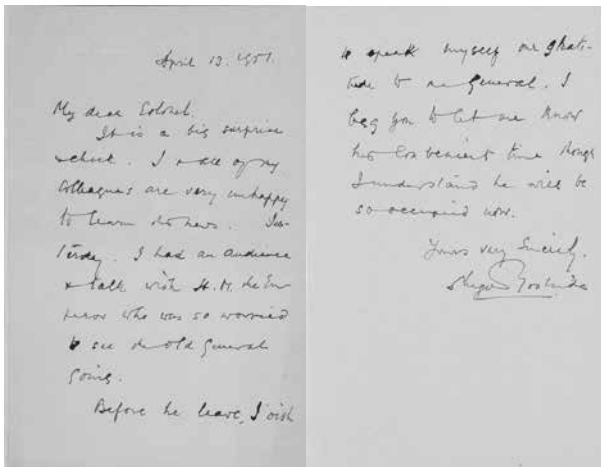
⑤ マッカーサー『回想記』一九六四(昭和三九)年刊

一九六四年四月五日にマッカーサーが死去した。連合国最高司令官  
時代のマッカーサーのもとでGHQの民政局長を務めたホイットニー  
(Courtney Whitney) は、同年に刊行されたマッカーサーの署名入り  
『回想記』(原題 *Reminiscences*) を、メッセージを添えて吉田に贈った。

⑥ 吉田茂米寿祝お礼風呂敷 一九六五(昭和四〇)年  
吉田の書があしらわれている。

吉田は一九六四年四月、大勲位菊花大綬章を授与され、六五年九月  
には八八歳の誕生日を迎えた。同年一〇月、天皇陛下より鳩杖を賜っ  
た。

⑦ 吉田茂記念メダル  
純銀製。吉田の肖像がかたどられている。



April 13, 1951  
 My dear Colonel,  
 It is a big surprise & shock. I & all of my colleagues are very unhappy to hear the news. Yesterday, I had an audience & talk with H. M. the Emperor who was so worried to see the old General going. Before he leave, I wish to speak myself our gratitude to the General. I beg you to let me know his convenient time though I understand he will be so occupied now.  
 Yours very sincerely,  
 Shigeru Yoshida

④吉田茂よりL・E・パンカー宛書翰

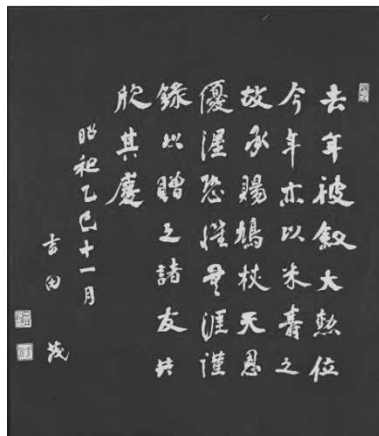


ホイットニーのメッセージ  
 To Prime Minister Yoshida:  
 whom General Mac Arthur held in such high esteem and affection.  
 Courtney Whitney  
 October 31, 1964

⑤マッカーサー『回想記』



⑦吉田茂記念メダル



⑥吉田茂米寿祝お礼風呂敷